

占領期・地方出版の児童雑誌

- 1945年～1949年 -

Occupation Period Children's Magazines Published in Rural Areas, 1945-1949

谷 暎 子

Eiko Tani

ABSTRACT

In children's literary and cultural history, it has been well known that in April of 1946 (in the post-war "Magazine Period") "Akatombo" (published by Jitsugyou no Nihonsha), "Kodomo no Hiroba" (published by Shinsekaisha), and other works began being published. Also, although these were discontinued in 1948, in the same period, a succession of children's literary arts publications including magazines designed for amusement came into publication. However, it has heretofore been almost unknown that in this same period, children's magazines were also being published in rural areas. One reason for this is that materials have been lost, preventing researchers from including them in the scope of their studies.

I am conducting the present study, seeking to bring to light these publications of children's literature, which have up to now gone almost unnoticed. This research into children's literature published in rural areas extends beyond children's literary and cultural research in one location. It also goes into detailing the locations of all the writers' activities, as I consider them to be indispensable in grasping the relationship between rural literature and the main body of literature in the Tokyo area.

One crucial step in the research was searching for children's magazines in the Prange Collection at the University of Maryland in the U.S.A. The Prange Collection contains 377 Japanese children's magazines, 121 of which were published in rural areas. This article includes materials from three magazines: an educational magazine ("Gin no Suzu" published by Hiroshima Tosho), a children's magazine ("Mutsu no Ko" published by Aoi Mori Sha), and a literary arts magazine ("Kita no Kodomo" published by Shin Nihon Bunka Kyokai).

Key Words: Occupation Period, children's magazines

はじめに

敗戦後、堰を切ったように児童雑誌が出版された。児童文学史では、この期を「雑誌期」と呼ぶ。検閲児童雑誌が所蔵されているブランゲ文庫（注1）で、多種多様な児童雑誌を見ていると「雑誌期」であることを実感できる。

これまで児童文学・文化関係の著書では、『赤とんぼ』（1946年4月・実業之日本社）、『子供の広場』（1946年4月・新世界社）、『銀河』（1946年10月・新潮社）など、いわゆる良心的な児童雑誌の発行とそれらの廃刊、同時に相次いだ娯楽誌の発行を指していることが多い。他に全国各地で出版されていた地方児童誌があったことは、残念なことに殆ど知られていない。地方誌は既に散逸していて、現在では発行されていたことを確かめることさえ難しい。これまで研究対象にならなかったのは、敗戦後の混乱期で資料が散逸してしまったこと、地方での児童文学・文化史研究の遅れが大きな要因といえよう。

地方児童誌の研究は、一地方の児童文学・文化史研究にとどまらず、作家の活動の軌跡を辿ることにもなり、中央との関わりを知る上でも避けて通れない。鳥越信は「児童文学研究に限らず、日本の近代文学を研究する際、「雑誌」という存在を抜きにしてことを進めることは不可能に近い。」（注2）と述べている。日本の場合には、雑誌が作家の作品発表の場となってきたからである。そうした意味で「児童雑誌を探索・研究することは、それ自体が一つの研究」であり、「明治以来今日に至るまでの雑誌の整備は、児童文学研究にとって最も基本的な課題であり、急務である」（注3）と指摘している。

この稿では、占領期に地方で発行された児童誌に焦点をあてた。なかでも特徴的な三誌——広島図書の『ぎんのすず』、青い森社の『むつの子』、新日本文化協会の『北の子供』について報告したい。

占領期に出版された児童雑誌

国立国会図書館の憲政資料室には、ブランゲ文庫所蔵雑誌・マイクロフィッシュ閲覧用の『日本占領期検閲雑誌』閲覧用目録（注4）が置かれている。「児童誌」の項をみると、全国各地で発行された377タイトルの児童誌名が収録されている。文芸雑誌、総合誌、科学誌、週刊誌、スポーツ誌、漫画誌、また地方出版の雑誌など、多種多様な雑誌が発行されていたことがわかる。ブランゲ文庫所蔵の児童誌が、当時の児童誌の全てとはいえないが、占領期に発行された児童誌の最も充実したコレクションであることには違いない。

これまで、戦後まもない地方出版の児童雑誌については、その実態を捉えるのは困難だろうと言われてきた。情報化時代の現代と違って、当時は地方出版について把握することは難しかったに違いない。筆者は都府県立の図書館に、その地方で出版された児童誌所蔵の有無についてレファレンスをお願いした。しかし、所蔵する図書館はごく僅かで、その存在さえ知らない図書館が多かった。それでも、なかには当時出版された雑誌や新聞を丹念に探し、児童誌の広告を見つけコピーを送付して下さった図書館もあった。また「出版されたことがなぜわかったのか」という質問をいただいたこともある。児童出版物の探索・調査をしていていつも経験するのだが、児童出版物が図書館、文学館等に所蔵されていることは本当に少ない。それだけに、ブランゲ文庫の児童誌の資料的価値は高く、児童誌の全容を知る上で貴重な資料群であることを、改めて知ることができた。

表1は、ブランゲ文庫に所蔵されている地方出版の児童雑誌の一覧である。北海道から九州まで実に121タイトル（改題を含むと123）、所蔵児童雑誌のおよそ三分の一弱である。創刊時期は1946年が17誌、1947年が20誌、1948年が34誌、1949年が32誌、不明8誌である。創刊時期

占領期・地方出版の児童雑誌

は1948年、49年が多い。前述した『赤とんぼ』などの児童雑誌は、1946年の創刊。相次いで児童雑誌が発行されたが、地方でそれらを手に入れることは容易ではなかったのも事実である。地元の子どものために雑誌を創りたいと考えた人達——教育や児童文化に関わる人達、地方出版社が計画・発行に向けて動いたし、疎開していた出版社・出版人、作家たちの活躍も見逃せない。用紙の確保が最も難しかったのは1947年である。比較的用紙確保がしやすくなった時期に、地方児童雑誌が創刊されていることも偶然

ではない。

文芸誌、総合誌が多いが、詩誌、学習誌、スポーツ誌などもあった。発行元は地方出版社、児童文化関係団体、教職員組合などに分類できる。今回とりあげるのは、いずれも地方出版社の児童雑誌で、比較的早い創刊（1946年）の三誌である。当時、三号誌に終わった地方児童誌が少なくない中で、三誌ともに発行期間が長い。それだけに地方児童文化の発展に大きく貢献した雑誌・出版社であったことも共通している。

表1 占領期に出版された地方児童誌

出版地	タイトル	出版社	部数
北海道（札幌）	おはなし	自由建設社	20
北海道（札幌）	北の子供	新日本文化協会	32
北海道（札幌）	科学と発明	帝国発明協会北海道支部	3
北海道（札幌）	私たちの科学	北海道科学普及協会	8
北海道（札幌）	ひばり	北方書院	7
北海道（札幌）	子ども朝日北海道版	朝日新聞社	
北海道（函館）	文化学園	函館小国民文化連盟	1
青森	むつの子	青い森社	19
青森	北の鈴	青森県教職員組合文化部	3
岩手（盛岡）	友達	新岩手社	9
宮城（仙台）	A o b a（東北小国民を改題）	河北新報社	12
宮城（仙台）	東北小国民	河北新報社	29
宮城（仙台）	北の教室	東北児童文化連盟	6
茨城（水海道町）	野火	新々堂書店	1
茨城（水戸）	茨城少年少女	茨城新聞社	3
栃木（宇都宮）	中学 栃木版	三友社出版部	1
栃木（国文寺村）	よい子ども	冒險講談社	4
群馬（高崎）	ともだち	朋友社	11
群馬（前橋）	マキバ	群馬出版株式会社	6
埼玉（熊谷）	青空	青空社	16
埼玉（秩父町）	子ウサギ	秩父図書刊行会	2
埼玉（秩父町）	山びこ	秩父図書刊行会	3
新潟	少年にいがた	新潟県社会問題研究会	3
新潟	夕焼	新潟県国語文化研究会	5
新潟	なかよし 一・二年	新潟日報社文化局	19
新潟	なかよし 三・四年	新潟日報社文化局	19
新潟	なかよし 五・六年	新潟日報社文化局	7
新潟	野球王	新潟日報社	
新潟	科学少国民	発明協会新潟県支部	28
富山（高岡）	中学生	立山図書出版株式会社	3
石川（金沢）	制服	ともしび社	3
石川（金沢）	学びの友	自由日本社	1

出版地	タイトル	出版社	部数
石川 (小松)	グループ	石川文化民報社	21
福井 (松岡町)	新中学生	中学生研究会	6
福井	新星	白光書房	3
福井	少年少女福井文壇	福井書房	1
長野 (白田町)	スクールタイムス	人文社	1
長野	野球王	信濃毎日新聞社	6
岐阜	スタディ中学ルーム	岐阜県教職員組合文化部	6
岐阜 (兼山町)	朝風	朝風社	5
岐阜 (今尾町)	観察と研究	水谷文溪堂	2
岐阜 (大垣)	私たちの科学	英進社出版部	3
静岡 (袋井町)	青い空	地方建設研究所	2
静岡 (袋井町)	青い鳥	地方建設研究所	1
静岡 (袋井町)	青雲	地方建設研究所	2
静岡 (韮山町)	たんぼぼ	たんぼぼ詩舎	5
愛知 (名古屋)	いちばん星	児童新聞社	8
愛知 (名古屋)	中京こどもまんが	中京新聞社	5
愛知 (名古屋)	野球王	名古屋タイムズ社	4
京都	こども詩の国	白井書房	8
京都	少年少女詩の国 (こども詩の国の改題)	白井書房	10
京都	青雲	永末書店	2
京都	野球王	京都新聞社	6
京都	のびゆくこども1ねん	教育科学研究会出版部	10
京都	のびゆくこども2ねん	教育科学研究会出版部	10
京都	のびゆくこども3ねん	教育科学研究会出版部	10
京都	のびゆくこども4年	教育科学研究会出版部	10
京都	のびゆくこども5年	教育科学研究会出版部	10
京都	のびゆくこども6年	教育科学研究会出版部	10
京都	小型列車	新児童社	7
京都	世界の子供	世界文学社	10
京都	風の子	大翠書院	3
京都	びじゅつ	都新聞社	4
京都	科学の泉	発明協会京都支部	4
大阪 (茨木町)	こどもの文化	新教育推進社	1
大阪	かぜの子	児童文化社	3
大阪	たのしい1ねんせい	児童文化社	1
大阪	あおいとり	中央出版印刷株式会社	5
兵庫 (神戸)	野球王	神戸新聞社	7
奈良 (丹波市町)	みちのこども	天理教道友社	1
奈良	金鈴	民主教育社	1
鳥取	山びこ	白兎書房	3
島根 (松江)	小学島根 五・六年	島根新聞社	1
岡山	ともだち	岡山新児童文化協会	2
岡山	野球王	山陽新聞社	7
岡山	青い窓	日本文教出版協会株式会社	5
広島 (呉)	みどりの丘	山陽図書株式会社	2
広島	子供の世界	広島児童文化協会	3
広島	ぎんのすず	広島図書株式会社	24
広島	青空	広島図書株式会社	4
広島	ギンノスズ	広島図書株式会社	2
広島	ぎんのすず1ねんせい	広島図書株式会社	12

占領期・地方出版の児童雑誌

出版地	タイトル	出版社	部数
広島	ぎんのすず2ねんせい	広島図書株式会社	4
広島	銀の鈴3ねんせい	広島図書株式会社	3
広島	銀の鈴4年生	広島図書株式会社	4
広島	銀の鈴5年生	広島図書株式会社	4
広島	銀の鈴6年生	広島図書株式会社	4
広島	ぎんのすずがくしゅうのとも一がくねん	広島図書株式会社	1
広島	ぎんのすずがくしゅうのとも二がくねん	広島図書株式会社	1
広島	新科学	広島図書株式会社	12
広島	プレイメート	広島図書株式会社	14
広島	スクールダイジェスト	中国四国教育図書出版協会	13
広島	野球王	中国新聞社	5
山口(下関)	せせらぎ	下関児童文化研究会文芸部	3
山口	私の中学	山口県教育協会	9
徳島	徳島市児童文集	徳島市教育振興会	3
徳島(板東町)	青い星	全国作文研究会	4
香川(丸亀)	こどもの国	四国出版株式会社	10
愛媛(松山)	野球王	愛媛新聞社	6
福岡(久留米)	下級きんのほし	金の星出版社	4
福岡(久留米)	上級金の星	金の星出版社	3
佐賀(大牟田)	ありあけ	九州朝日新聞社	2
佐賀(大牟田)	ひかりの友	児童文化研究会光の友社	1
福岡	少年少女ふれんど	永田書店	2
福岡	学びのしるべ	九州小学教育社	1
福岡	少国民クラブ	国民文芸社	3
福岡	小学ダイジェスト	春秋社	3
福岡	中学ダイジェスト	春秋社	3
福岡	つの笛	小学校教科研究会	1
福岡	野球王	夕刊フクニチ新聞社	4
佐賀	こどもの友 1、2、3年生用	佐賀教育出版株式会社	4
佐賀	こどもの友 4、5、6年生用	佐賀教育出版株式会社	5
長崎	学園長崎	長崎日日新聞社	5
熊本	Friend九州	九州出版文化協会	2
熊本	フレンド九州	九州出版文化協会	4
熊本	新少年ダイジェスト	九州図書	1
熊本	熊本こども新聞	熊本こども新聞社	16
熊本	子供のふえ	熊本市教職員組合	2
熊本	中学倶楽部	熊本中学国語教育研究会	1
熊本	野球王	熊本日日新聞社	6
宮崎	子供部屋	青少年文化研究社	4
鹿児島(伊敷村)	私たちの科学	科学教育研究会	1
鹿児島	野球王	南日本新聞社	4

1. 広島図書の児童雑誌

広島図書を代表するのは学習雑誌『ぎんのすず』である。しかし、他に幼児から高校生までを対象に雑誌を発行していたことは、余り知られていない。表2は広島図書発行の児童雑誌をまとめたものである。

広島図書は雑誌の他に単行本も出版している。「銀の鈴文庫」―童話・名作篇、伝記・創作篇、社会・科学篇、学習篇の4種を1948年から出版。100冊の予定であったが、現在確認されたのは80冊である。他にピーターシャム夫妻の「社会科お話の本」、ロー・ピーターソン社

表2 広島図書発行の雑誌

雑誌名	創刊年月	対象
銀の鈴	1946年10月 1948年4月	小学生用教育雑誌 1. 2年用 3. 4年用 5. 6年用 学年別になる
科学新聞	1947年4月	中学生用
新科学	1947年11月	科学新聞改題
銀鈴	1947年9月	中学生用教育雑誌
青空	1948年4月	銀鈴を改題、女学生用教養雑誌となる
プレイメート	1948年4月	幼児向け観察用絵本
理科の友	1948年4月	小学1・2・3年用
新社会	1948年12月	中学生用社会科雑誌
理科と社会科	1949年4月	新科学と新社会を合併、中学生用総合雑誌
こどものうた	1948年12月	童謡集

の「基礎科学教育叢書」などの翻訳本、そして1951年以降は教科書の出版も手がけている。

児童出版物の多様性、その企画力、優れた印刷技術は地方出版社の中でも際立った存在である。1995年にプランク文庫で広島図書の出版物に出合ったとき、原爆で壊滅状態だった広島での出版事業だけに驚きを禁じえなかった。なぜ、広島でこのような出版活動が展開できたのか、それを知りたくて調査を始めた。1997年には広島中央図書館、大阪国際児童文学館、国立国会図書館で広島図書の出版物を閲覧、そして関連参考文献・資料の収集を始めた。残念なことに当時は、広島図書出版物の全容を知る原資料を所蔵している図書館はなかった。しかし、松井富一の書いた『国際的出版都市建設の夢－広島図書の現在と将来－』（1949年・非売品）で広島図書の概要を知り、その後、森本和子の『占領下の翻訳絵本と教育－広島図書について－』（1998年・修士論文）で、さらに詳細に広島図書について知見を得ることができた。1999年には大阪・寝屋川市在住の松井早苗（松井富一・夫人）から、700点に及ぶ資料が広島市中央図書館に寄贈され、2000年10月に「よみがえるぎんのすずの世界」展が開催され、寄贈資料を見る機会にも恵まれた。

広島図書の松井富一（1909～1970）は、被爆から間もなく残った工場・印刷機をもとに印刷事業を再開。前身は1943年に国策の企業合併によってできた広島印刷所で、軍部の印刷を引き受けていたという。そして戦後は、占領軍の指定工場となっている。著書には、「青天井の下で蜜柑箱に腰を下し、焦土の中に読書していたあの戦災孤児の姿」（注5）に心を動かし、印刷業から教育出版事業に転じたと語られている。

『ぎんのすず』は1946年8月6日の創刊で、広島児童文化振興会の発行であった。廃墟の中で暮らす子どもたちの心を癒したいと願い、児童文化振興会を結成した教師たちは、タブロイド判2頁の新聞を発行した。『銀の鈴』・高学年と『ぎんのすず』・低学年の2種で、紙名は子どもたちからの公募で決めたという。これが松井富一の目にとまり、同年10月号は雑誌形態の『ギンノスズ』（1.2年用）、『ぎんのすず』（3.4年用）、『銀の鈴』（5.6年用）として広島図書から発行された。11月号からは広島版、山陽版、山陰版、九州版を発行。当初の編集は広島児童文化振興会の教師たちが担当していたが、半年後には松井富一が編集・印刷・発行人となっている。

『ギンノスズ』一・二ネンノトモ	
第1巻第2号(10月号)	
1946年10月1日	
モクジ	
表紙	
オイハヒノコトバ(表紙裏) 長田新	
アイサツ(表紙裏) 伊達高道	
ミナサン(表紙裏) 松井富一	
クリヒロビ 高井正文・中島秋峯〔え〕	1
やまのくに 森淑子・中島秋峯〔え〕	2
べんきやうしつ	
広島比治山・国民学校指導	4
しふじ 中島秋峯	6
こうさく 広島千田校 山田登	7
あきの七草 高井正文・中島秋峯〔え〕	8
ヒロシマ 峰つよし・中島秋峯〔え〕	10
ウサギノデンボウハイダツ	
浜本正孝指導・中島秋峯〔え〕	12
マンガ 中島秋峯	14
ツヅリカタキヤウシツ 児童作品	16

広島図書は北海道から九州まで全国販売網を組織・機能させ、地方発行の全国誌として発展していく。その発展ぶりは発行部数を見るとよくわかる。1947年末には25万部、48年末には61万部、49年6月には120万部と飛躍的に部数を延ばし、当時の地方雑誌のなかでは異色の存在であった。松井は「出版、印刷、販売の三位一体経営」(注6)と、学校への直接販売方式の採用が他社の追随を許さない成果をあげたと述懐している。『銀鈴』第1巻第1号(1947年9月1日)の奥付からは、配給元が中国、九州、四国、東海、近畿に設置され他に特約発売元が全国各地にあったことがわかる。札幌の特約発売元は富貴堂(書店・南1西3)であった。その後、1948年1月には「札幌銀の鈴社」が設立されている。詳細は今後の調査課題でもあるが、『銀の鈴』の懸賞当選者の中には、北海道の子

どもたちの名前も掲載されていて読者も相当数いたことが推測できる。広島中央図書館に保存されていた「札幌銀の鈴社」のチラシ(1948年1月)には、広島図書は北海道の製紙、印刷設備と提携して現地印刷を企画中と書かれているが実現していない。

ブランゲ文庫には、銀の鈴社四国支所(高知市)の『学校月報』第7号(1948年2月)が保存されていた。タブロイド版2頁で、四国各地に学校にむけて発行された広報紙と思われる。総司令部巡回視学官の寄稿、広島図書主催「教育懇談会」などの記録を掲載。また、この号からは『銀の鈴』も『ぎんの鈴文庫』も「文部省推薦」であること、『ギンノスズ』『ぎんのすず』『銀の鈴』『銀鈴』『新科学』12月号(1947年)を皇太子に献上したことなどを知ることができた。

松井によると広島は中国、四国の製紙供給地を控え、海陸輸送の至便の地であるなど出版の物的条件があり、広島文理科大学の学長・長田新はじめ教授人の協力など人的条件にも恵まれていたという。出版事業の順調な発展で得た潤沢な資金や人脈を使って著名な作家、画家、漫画家、作曲家に執筆を依頼している。ちなみに支払われた原稿料は、一般の3倍だったと聞く。

松井の行動力や商才が大きな力として働いたのは確かであろう。加えてGHQ(連合軍総司令部)、CIE(民間情報教育局)などからの協力・支援があったことも大きいのではないか。前述のように戦後の出発時点で、広島印刷は占領軍の指定工場になっている。また『児童劇場』には、「原爆地に児童会館」の見出しで、「進駐軍軍政部の絶大なる援助を得て」(注7)建設されることになったと報告されている。他にも広島図書発行の諸雑誌に、米国情報部からの具体的な協力・支援の形を見ることができる。例えば『銀鈴』ではグラビアで、米国情報部提供の「アメリカの中学校」を連載。絵雑誌『ブ

レイメイト』の付録「先生と母の頁」には、国立アメリカ幼稚園協会の家庭教育に関する文が連載されている。『ぎんのすず』も同様で、この時期に出版された雑誌のなかではアメリカの教育・子どもの生活に関する情報量が際立って多い。広島図書編集局長・長尾正憲は「毎週航空便で新教育についての種々の文献が入手でき、さらにロー・ピーターソン、ウインストン等の米国有数の会社と契約し、アメリカ教科書数十種の日本版翻訳権を独占して、その内容を銀の鈴に網羅出来る」（注8）と述べていることでも裏付けられよう。

創刊当時の『銀の鈴』では、地元の教師たちが執筆・編集に大きな役割を果たしていた。松井が編集・発行人になってからは次第に中央で活躍する作家たちの作品が掲載されるようになる。松井は、「文化の地方分散の視点から『銀の鈴』が地方色を持つことは喜ぶべきことだが、当時においては、地方的ということは文化的に低調であることを意味していた。全国的な水準に高めるために、企画編集陣を刷新して、中央の作家画家に執筆を依頼。地方的臭気を脱して全国的な水準に肉薄した」（注9）と述べている。常に中央を意識した松井の姿勢は『銀鈴』を改題・発行した『青空』（1948年8月）に端的に現れている。女学生向けの教養誌で表紙やファッション記事など内容の斬新さが目を引く。当時、抒情画家・中原淳一が編集していた『ひまわり』を意識しての発行だったという。しかし、あえて地方色をなくし中央を意識した結果は、休刊（廃刊）を招くことにもなったのだ。松井はさらに教科書出版に夢をかけるが、経営を圧迫する結果となって広島図書は1953年頃倒産したという。しかし、その後も『ぎんのすず』は形を変えて他の出版社などに引き継がれ、1995年3月の月刊絵本『ぎんのすず』で終刊となった。

広島図書が展開した児童文化活動も、地方出

版社のなかでは特記すべきことである。広島はもちろんのこと、福岡、名古屋、京都、高知などでの『銀の鈴』子供祭、「青空コンサート」、『レイメイト』の普及を兼ねた保母講習会の開催、バスによる移動図書館活動、映画製作など広島図書の雑誌の記事から知ることができる。潤沢な資金を使つてのことではあるが、その先見性には目を見張るものがあり、文化事業からは、松井の教育・文化への熱いまなざしを感じることができる。

広島では現在、児童文学者・三浦精子による『ぎんのすず』の目録作りや、広島図書の果たした役割を検証しようと「ぎんのすず研究会」が発足・研究活動が始まった。50年を経た今、『ぎんのすず』を通して広島図書の足跡が次第に明らかになろうとしていることは、戦後児童出版物を研究している筆者にとっては感慨深い。

2. 青い森社の『むつの子』

月刊児童雑誌『陸奥の子』は、1946年11月の創刊。第2号まで『陸奥の子』と漢字での表記され、3号から『むつの子』と平仮名表記に変わっている。第21号・1949年8月まで続いたが、2号から題字の上に「青森県の少国民雑誌」と記載されるようになった。発行部数は最盛期は8,000部（16号）で青森市、弘前市、八戸市の小学校、郡部の小学校にも普及していたようだ。

『陸奥の子』創刊号十一月号

1946年11月1日

もくじ

表紙題字 久留島武彦先生

表紙絵 武井武雄先生

推薦の言葉 青森県知事大野連治閣下

童話 つばめのおうち 内山憲尚 4

童話 飛行トランク アンダアセン 11

童話 雪子おばさん 花戸久子 18

少年ドウイツヒ 相馬克夫 14

漫画 森ちやん 宮尾しげを	7
漫画 スクスク兄妹 山崎善一	21
アルプ山の牧笛 ヨネ・サトウ	8
童謡 芽ばえ はぶねよねさく	2
童謡 笛吹きぢいさま 川島健至	10
童謡 ネネサウデシヨ 志田十三	25
童謡 運動会 田中好太郎	
版画 十和田湖 佐藤米次郎	16
私たちの作品集	22
挿絵・カット・さとう・よねじろう	

青い森社は、韓国から引き揚げてきた佐藤米太郎、米次郎の兄弟が1946年10月に創立。青森県下の子どもたちに「夢と希望をあたえたい」と『陸奥の子』を発行を考えての出発だったという。発行人は佐藤米太郎、編集人は佐藤米次郎である。事務所は青森市浦町橋本141番地にあつて、通巻3号・1947年1月には佐藤兄弟に他に社員3名の名が記されている。同年秋には山口晴温が入社し、49年終刊まで佐藤米次郎と共に編集を担当した。山口によると「社会奉仕的な経営と、誌代未納による資金難に加えて、中央大手出版社から新しい雑誌がどんどん出るようになって、時代の趨勢にはかなわず、惜しまれながら第21号（1949年8月）で廃刊を余儀なくされた」（注10）という。第22号の原稿を印刷所に入れた後の休刊だった。その後、活版印刷機を入れ印刷所として官庁の書類、学校新聞、カレンダーなどを手がけたようだ。

佐藤米次郎（1915年～）は版画家で、1943年に日本版画協会会員となる。1935年から久留島武彦、芦屋ろそん、内山愨尚に師事して口演童話運動に参加。戦後は日本童話協会の評議員を努め、機関誌『童話界』の表紙絵・版画を制作している。

山口晴温（1926年～）は、『むつの子』編集時代に佐藤米次郎に進められて版画をはじめたという。日本童画家会会員で、現在も版画、児

童図書、児童文化活動で、そして青森県児童文学研究会の会員としても活躍しておられる。

創刊号につけられた帯には、「青森県で生まれた私たちの少国民雑誌」と書かれていて、創刊号はA5判32頁。題字は久留島武彦、表紙絵は武井武雄が描いている。編集後記には、「この本をださねばならないと決心した」のは、①書店に本がなくて毎月読めない、②近ごろの本は内容は良いが難しい、③良い作文などを多くの人に知らせたい、④明るく元気な少国民にしたいと考えてのことだと記されている。

編集担当の佐藤米次郎は日本童話協会の評議員で、地方で児童誌を発行するのに佐藤氏の人脈は有利に働いたに違いない。通巻第6号～第21号には、毎号「青い森社賛助会員御芳名」が紹介されている。そのなかから第一線で活躍していた人をあげ、実際に『むつの子』に寄稿している人には下線で表してみた。

童話家・久留島武彦、岸辺福雄、関屋五十二、内山愨尚

童画家・初山滋、武井武雄、川島はるよ

版画家・棟方志功、川上澄夫、恩地孝四郎、前川千帆

漫画家・宮尾しげを、田川水泡

童話作家・小川未明、村岡花子、横山美智子、武田雪夫、芦屋芦村

『童話界』創刊号（1946年11月21日）には、「結成中の支部」の中に「青森支部 代表者・佐藤米次郎」とあり、「各地童話界寸見」には、青森支部の「準備会事務所は青森市浦町佐藤方である。ここでは青森県下の子供によませる雑誌も計画している。」と『むつの子』のことが紹介されている。従って日本童話協会の会員にも『むつの子』の存在は知られていたことになる。

ちなみに日本童話協会の機関誌『童話界』創刊号の表紙には目次と綱領が掲載されている。

1、新生日本の童話および童話を基調とせる児童芸術の創造。2、学的基礎に立脚せる正しき

童話の研究。3、児童生活を醇化し拡充する純正なる文化財として童話の普及を掲げて戦後まもなく組織された。第2巻第1号には理事長は藤沢衛彦、理事に内山憲尚、長沼依山など6名。名誉会員として安倍季雄、小川未明、沖野岩三郎、岸辺福雄、久留島武彦、倉橋惣三、浜田広介、弘田龍太郎など著名人16人の名が記されている。

執筆者の久留島武彦（1874～1960）、内山憲尚（1899～1979）は、口演童話の元老として知られているが、前述のように当時は久留島が名誉会員、内山は理事として活躍していた。佐藤米次郎が当時すでに版画家として活躍していたことで、童画家との交流もあり第一線で活躍していた武井武雄（1894～1983）、が創刊号の表紙絵、川島はるよ（1911～）が18から21号（1949年5月～8月）の表紙絵を描いている。川島が童話家・関屋五十二と結婚したのが1947年のことなので、『むつの子』には関屋を通して関わったと思われる。

漫画でも宮尾しげを（1902～1982）、田川水泡（1899～1987）の大家が執筆。宮尾は初めての児童漫画専門の作家と知られるが、「団子串助漫遊記」などの絵物語で、大正末から昭和初期は宮尾の時代と言われるほど人気を得た漫画家。『むつの子』には、創刊号から「森ちゃん」を連載している。また「のらくろ」漫画で一世を風靡した田川水泡は、コマ割漫画の基礎をつくり児童文化での漫画の地位を確立したことで知られる。田川は1948年1月号から四コマ漫画「のらくろとしろはち」を連載している。

青い森社は『むつの子』を発行しながら、青森の子どもたちのための文化事業を行っている。主催事業、共催事業などがあるが主なものを次に記す。

- ・1947年3月 青森市教職員組合主催、青い森社後援で「子どもの夕べ」開催
- ・1947年7月 内山憲尚の口演童話、指人形の会を二つの小学校で開催。

- ・1947年9月 第1回日本童画展（青森展）出品者19人35点。
初山滋、武井武雄、茂田井武、安泰、黒崎義介、北田卓史、大石哲路など著名な作家の原画が市民の目を楽しませたという。
- ・1947年12月 佐藤米次郎が『むつの子』に連載したものを『やさしい木版画の作りかた』（B6判24頁）として出版。版画指導の手引として利用
- ・1948年3月 石浜小・中学校で、童画と版画展を開催。後日、佐藤米次郎の版画講習会を開く。
- ・1948年4月 青森東宝映画劇場で口演童話会と映画の会開催。
- ・1948年5月 第2回童画展（青森展）
- ・1948年11月 山口晴温らが「趣味の創作年賀状展」を開催。会場で木版画の制作実習と版画年賀状の制作注文に応じる。

青森では1948年7月学習雑誌『北の鈴』（A5判36頁）が、青森県教職員組合文化部によって創刊された。編集担当の田中正太郎は、雑誌出版の先輩である青い森社を訪ね助言を受けている。相談に応じた佐藤米次郎は『北の鈴』の題字を書き、山口晴温は表紙絵を描いたという。発行部数は2千部だというのが、同じ青森の子どもたちを対象にした児童雑誌を発行しながら、協力関係にあったことを知ることができた。この時期、青森の子どもたちは『むつの子』『北の鈴』、そして広島図書『ぎんのすず』、新岩手社の『友達』、『少年読売』などを購読していたようだ。

青い森社には、青森の画家、詩人、演劇、音楽関係者が集まり文化談義が繰り広げられ文化サロンのようだったという。児童文学で活躍している北影介、鈴木喜代春もいた。他に青森県児童文学研究会のメンバーとして、児童文化活動に携わった人達も多いと聞く。

3. 新日本文化協会の『北の子供』

『北の子供』は、北海道の子どもたちのために発行された児童雑誌である。1946年4月30日に新日本文化協会が創刊。東京で発行された『赤とんぼ』や『子供の広場』と同時期の創刊で、『銀河』よりも早い。そして『赤とんぼ』『銀河』廃刊後の1950年1月まで続いた。最盛期の発行部数は15,000部である。

『北の子供』第1巻第1号4月号	
1946年4月30日	
目次	
〔表紙〕春の子供	能勢真美 表紙1 表紙2
〔広告〕北の子供会館	
出発の言葉	
スペインのアルタミラ洞窟内部の多色壁画	
〔口絵〕〔アート紙・図版1〕	
名画鑑賞〔解説〕	能勢真美
スペインアルタミラ洞窟内部の多色壁画	
	〔図版裏〕
〔児童画〕北の子供第1巻第1号〔扉〕	
	〔1〕
ぶらんこ（童話）	松田善雄 2～11
目つぶり小父さんこんにちは（童話）	
	中村篤九 12～18
〔児童詩〕（特選）	
こども評論 封建主義の話	櫻井忠 20～29
これからの内容	29
乳搾りの歌（詩）	松田善雄 30～31
偉人に学ぶ ジョージ・ワシントン	
	三浦一 32～37
創刊号に執筆された人	37
文化への夢 こどもの世界をつくる夢	
	藤澤健夫 38～43
文章 飯田広太郎〔8篇〕	44～45
児童作品募集	55
選評	飯田広太郎 56～57

来月の内容	57
春の詩	百田宗治〔4篇〕 58～59
春の詩選評○佳作	百田宗治 60～61
文化だより	小林英一 62～63
編集部より	64
奥付	64
表紙3	
此の種について〔花の種の入った袋に印刷〕	
	附録

地方で児童雑誌の発行を続けることは、さまざまな困難を伴うことは想像に難くない。『北の子供』も1946年6・7月号を11月に発行。月刊雑誌の5ヵ月遅れという信じ難いことが起きている。理事長（佐藤信一から須田多四郎）が交替し経営上の危機を乗り越えて1950年1月号まで発行した。1月号には次号の内容予告が掲載されているので、2月号も発行予定であったことがわかる。誌代の未収に加えて既に1948年2月頃から減誌となり、発行部数も次第に8000部～6000部と最盛期の半分に落ちている。

当時編集を担当していた名達修治は、表紙絵を描いていた梁川剛一宛の手紙に「出版界、わけても児童雑誌の生命は全く暗澹たるものであり、未層有の出版界の不振の波は良心的な刊行を続けてきた中央一流雑誌「赤とんぼ」「少国民世界」「子供の青空」「広場」の廃刊を見、ついに新潮社発行の「銀河」ですら八月号をもって休刊を余儀ない哀情を露呈している情勢です。こうした破局の姿が澎湃として全国に起こる中を孜々として北方の一角から「北の子供」の育成を続けることの至難性は言うまでもないこと」と、苦境にあることを訴えている。専務・武藤鉄寿も梁川宛の手紙（1949年7月）に、「農村方面の不況を反映して益々凋落の一途にあります」と報告している。

『北の子供』創刊号は、次のような「出発の

言葉」で始まる。

君はみましたか。

春のあたたかい光をうけてぐんぐん伸びていく新しい草や木の芽の力を。今、歴史は廻転し、私達をとりまく、自由なひろびろした世界が展開しました。この新しい世界の中へ歩き出そうとしている少年少女の一人が君です。君は、何か心の底からわき上がってくる力を感じるでしょう。そして新しい日本について考え、たのしい世界の夢をえがいているでしょう。

君と共に、新しい世界へ、ふみ出そうとする『北の子供』も、君にまげず、たくさん新しい世界へ夢をもっております。新しく、正しく、明るい人になり、又そのような世界をきづき上げるために、では共に、元気よく第一歩をふみ出しましょう。

「これからの内容」には、「世界の子どもとして育っていく児童と共に、新しい平和の路を拓いていく雑誌」であると宣言している。こうした子どもへの呼びかけは、『北の子供』を創ろうとしていた大人たちの心情の吐露といえるのではないか。“新しい世界を一緒に創ろう、一緒に平和の道を拓いていこう”という呼びかけからは、人格をもった人間として子どもを認め、次代を切り拓く存在として子どもを捉えようとする児童観の芽生えをみることができ。しかし、同時に創刊号の「先生方へのお願い」の文からは、多分に情感的であったこともわかる。

虐げられている現実の中で、子ども達が一番今求めているものは、明るく楽しい夢と希望です。物質的に恵まれていない子供達にせめて精神的な潤いのいささかなりとも与えたい。

編集指針と思われる三点もあげられている。

- (1) 夢とたのしさを子供たちに与えることを本旨とし、全体を文芸味豊かな香りたかい

ものとする。

- (2) 世界を古今の広場で子供達にのびのびとした平和な人間的教養を与えるものとする。
 (3) 子供たちの作品を取り上げて子ども自らが萌え出づるための温床たらしめる。

以上の指針に沿って雑誌の内容が構成されたようだが、①文芸作品、②評論、自然や郷土に関すること、③投稿欄、④娯楽その他に大別できよう。編集人がたびたび変わったこともあって、内容構成も変わっていく。

執筆者は和田徹三、更科源蔵、早川三代治、吉田十四雄、八森虎太郎、加藤愛夫、支部沈黙、木村不二男、小田邦雄、和田義雄など、北海道の作家を総動員している。中央からは川崎大治、竹内てるよ、北昌八穂、北川千代、巽聖歌、草野心平、尾崎喜八、丸山薫、北園克衛、森荘巴池、石森延男などが寄稿している。

表紙絵、絵物語、挿絵などは能勢真美、山田義夫、岸田賢治、国松登、高橋北修、今田敬一、栃内忠男、本間莞彩、小山浩子など北海道画壇で活躍していた画家たちが寄稿。高倉新一郎など大学の研究者、そして北海道に疎開していた作家たちの活躍も目立つ。特に、梁川剛一（彫刻家・挿絵画家）が表紙絵や絵物語などの挿絵を、百田宗治（詩人）は投稿欄・詩の選評を担当しそれぞれの分野で指導的な役割を果たした。他に疎開作家として浅野晃、寺島征史、時雨音羽などが寄稿している。疎開作家の足跡は、ほとんど知られていない。作家活動の全容を把握するためにも、今後の研究が必要であろう。また投稿欄の子どもの作品は、地域の子ども生活史の資料としても貴重なものである。

『北の子供』を発行した新日本文化協会は、1946年6月に財団法人として認可されている。しかし、その前身は1941年12月に設立された北海道教育紙芝居協会であった。戦中は国策宣伝、戦意高揚の紙芝居を提供する北海道の元締的存在であった。翼賛文化団体が、敗戦を機に新

日本文化協会と改称、紙芝居を携えて被災地を訪れ「新ニッポン明朗建設運動」を展開している。一般の出版社と異なるのは、まず実践活動、後に出版活動を始めていることである。敗戦の年の11月には、映画館を貸し切って「新ニッポン子供会」を開催。北海道新聞によると4,000名の子どもが集まったという。戦中に築いた潤沢な資金を使って、玩具製作、紙芝居の出版、女流叢書の出版など、文化事業の手を広げ資金を使い果し経営困難に陥ったという。

『北の子供』の発行は、新日本文化協会の当初の計画にはなかったものである。それが中心的事業となり、最後まで残ったことも興味深い。創刊3周年記念愛読者大会が開かれたのは、1948年6月5日のこと。プログラムからは、当時の児童文化活動の様子が伝わる。この3周年記念愛読者大会を機に、人形劇団「こまどり座」が誕生する。『北の子供』の宣伝・拡張のために結成されたもので、主宰は編集を担当していた和田義雄（後に児童文学者として活躍）であった。すでに減誌が始まっていた時期であるが、何とかそれを切り換えそうと考えたのではないか。

「こまどり座」は、「北の子供会（聴く雑誌の会）」と称して、道内各地の学校を訪ね童話、紙芝居、人形劇などを公演、希望によって「人形のやりかた指導」「雑誌が出来上るまで」なども講演したという。こうした公演活動を支えたのは北海道教職員組合、炭鉱の労働組合、地方の児童文化団体であった。出版社の専属人形劇団公演は、地方の子どもたちを大いに喜ばせたが、直接『北の子供』の拡張には繋らず半年後に廃刊となる。その後、「こまどり座」は専門人形劇団として独立し、1953年9月まで北海道、東北地方などで公演活動を続けた。

『北の子供』についての詳細は、拙著「児童雑誌『北の子供』解題(1)と細目」「児童雑誌『北の子供』解題(2)」(注11)を参照していただき

たい。

おわりに

占領期に発行された地方児童雑誌三誌を概観した。三誌とも当時としては長命で、それぞれに特徴を発揮していたことがわかる。『ぎんのすず』は学習誌、『むつの子』は童話雑誌、『北の子供』は児童文芸雑誌として、子どもたちに届けられた。それぞれに時代を映す児童雑誌だが、学校への直販方式であったこと、雑誌発行だけでなく地方児童文化の発展に大きく貢献したことが共通していた。戦後の混乱期で、生活を維持することが大変だった時代である。どの雑誌をみても、編集・出版には素人だったことが誌面から見え隠れする。しかし、同時に児童誌出版への熱意も伝わる。それぞれの出版社の足跡をみると、出版を含めて児童文化活動に積極的で、児童文化運動としての側面をもっていたことが指摘できよう。

『ぎんのすず』は、地方雑誌から全国誌として全国の子どもたちに届けられた。従って、地方色を取って払拭した編集方針のもとに発行された。『むつの子』は、中心となった佐藤米次郎の人脈で日本童話協会や日本童画協会の有力なメンバーの協力があつた。『北の子供』が発行されていた時期、札幌は出版ブームに沸いていた。1945年7月には10指に満たない出版社が、ピーク時に1948年には130社を数えたほどである。従って、出版人・編集人などとの関わりから、中央の作家たちとの人脈ができたと推測できよう。また、疎開していた作家などの協力も大きかった。札幌で『北の子供』が発行されていた時期には、童話雑誌『おはなし』、『ひばり』、科学雑誌『私たちの科学』、『科学と発明』、学習誌『中学生』、そして函館で児童文化雑誌『文化学園』が発行されていたのである。これらのなかで最も多く北海道各地の子どもたちに読まれたのが『北の子供』であった。

今後の課題として、他の地方児童誌を探索しその性格や内容を解明すること。今回取り上げた三誌も含めて総目次の作成と、寄稿した作家の作品が全集などに収録されているかどうかを確認しなければならない。当時の児童誌の書き手は、必ずしも児童文学を専門にしている作家でない。従って、児童雑誌に発表された作品が全集から省かれている場合も少なくない。作家の活動、作品の全容を知るためにも欠かせない作業と考えるので、今後も調査を続けたい。

(文中は敬称略)

調査を進めるにあたり資料を提供して下さった広島三浦精子氏、広島中央図書館、青森の山口晴温氏にお礼を申し上げたい。

注

注1) プランゲ文庫は米国・州立メリーランド大学にある。占領期の日本では、1945年10月～1959年10月までGHQによる出版物の検閲が行われていた。メリーランド大学に席を置いたまま、GHQ参謀二部で仕事をしてきた歴史学者・プランゲ博士は、検閲済の出版物の資料的価値に注目し、これを譲り受けて米国に持ち帰りメリーランド大学に寄贈したものである。このなかに8000冊の児童書と相当数に児童雑誌、児童新聞が所蔵されている。雑誌のマイクロフィッシュは国立国会図書館の憲政資料室で、北海道出版の雑誌マイクロフィッシュは、道立図書館北方資料室で閲覧できるようになった。

注2) 鳥越信「児童文学における「雑誌」の位置 『国際児童文学館紀要』

大阪国際児童文学館 1985年 3頁

注3) 前掲書2に同じ 16頁

大阪国際児童文学館 1985年 3頁

注4) 閲覧用目録『日本占領期検閲雑誌』(メリーランド大学図書館ゴードン・W・プランゲ

文庫所蔵) 1945年～1949年(昭和20年～昭和24年)

国立国会図書館 1996年

注5) 松井富一「出版都市としての広島」『国際的出版都市建設の夢－広島図書館の現在と将来－』 広島図書 非売品 1946年 6頁

注6) 前掲書5に同じ 6頁

注7) 「壁しんぶん・原爆地広島に児童会館」『児童劇場』 復刊2号 児童劇場社 1948年 32頁

注8) 長尾正憲「教育雑誌「銀の鈴」の五大特徴」『銀の鈴は子供に何を教えようとするか』 広島図書 1950年 2頁

注9) 前掲書5に同じ 6頁

注10) 山口晴温「青い森社」と「むつの子」について 『ずぐり』 第46号 青森県児童文学研究会 1990年

注11) 谷暎子「児童雑誌『北の子供』 解題(1)と細目」『北星学園女子短期大学紀要』 第27号 北星学園女子短期大学 1990年
谷暎子「児童雑誌『北の子供』 解題(2)」『北星学園女子短期大学紀要』 第28号 北星学園女子短期大学 1991年

参考文献

にれの樹会編『北海道の児童文学』 北海道新聞社 1979年

青森県児童文学研究会機関誌『ずぐり』46号 青森県児童文学研究会 1990年

青森県児童文学研究会機関誌『ずぐり』47号 青森県児童文学研究会 1991年

山口晴温編『昨日、明日、今日－わたしの庶民史を語るⅢ－』 非売品 二曜会 1998年

石井伸司「ぎんのすずの遺産」第1部～第3部 『中国新聞』 2000年

日本児童文学者協会編『復興期の思想と文学』 偕成社 1979年